

旭

印刷を支え加工を活かす

なります。

95パーセントもの仕事を失うというのは、どういう状況ですか。

当時の年商は、約1億5000万円。一番の得意先が、それまでうちに外注していたカレンダー製造の内製化を決定したため、8700万円の取り引きが消滅しました。

それに続き、2番目に取引額が多かった企業も外注を取りやめ、5400万円分の年間取引額が泡と消えたのです。合わせて1億4100万円分の受注が、一気に減ったんですよ。今から思うと震える話なのですが、当時は何とも思わず、「他から仕事をとればいい」と考えていましたね。

ただ同時期、それまで扱っていなかった中綴じを行えるようにするため、2億円の機械を購入したばかりでした。ですからもう必死で、営業の電話をかけ続けましたよ。競争は激しかったものの、面白いぐらい仕事は集まりました。その後5年間で8台の機械を購入し、中綴じにおいてはその当時大阪でトップの売り上げを誇るまでになったのです。

銀行も当てにできず、印刷物の値

旭紙工株式会社
代表取締役社長

橋野 昌幸

(前編の続き)

一度は入社しないと決めた、旭紙工株式会社。しかし、橋野昌幸社長はお父様を助けるため自らその一員となる道を選びました。新卒採用を強化し、人員を増やすことで会社の業績を着々と向上にしていけます。しかし、その後思いもかけない試練が会社に襲い掛かる事態に。



▲社員とともに韓国に工場見学へ

段も下がっていく中、投資を重ねて売り上げを伸ばし、必死に返済を続けました。ようやく債務超過を解消することができたのは、2004年(平成16年)。その年、決算書を仏壇に供えて、一晩中泣きました。「これでやっと普通の会社になれる」と思ったんです。社員の皆さんには、本当によく頑張ってくれたと感謝の言葉しかありません。だから、自分の目の黒いうちは、絶対に皆を裏切るようなことはしません。

今後の展望についてお話を聞かせただけですか。

工場が老朽化してきたのに伴い、よりよい環境で仕事ができるべく新工場の設立に向けて動き出しています。時代の流れの中で、会社が重きを置くものも変わってきました。かつてはおお客様第一主義でしたが、今は社員の働きやすさが一番です。

印刷業界全体を見渡せば縮小傾向にあります。でもその中にあると、うちは私が入った頃に比べると、社員数も売り上げも10倍になっています。

経済活動のあるところには印刷

物がある。購買意欲に働きかける力は、デジタル以上のものがあります。提案の工夫しだいで、いくらでも商機はある。今後も、人材育成や提案力を強化し、よいものづくりを続けていきたいと思っています。

最後に、社員の皆さまへメッセージをお願いします。

「今までついてきてくれて、本当にありがとう」が第一です。そして、皆さんには、今後「深く考える」というのを意識してもらいたい。よく考え、勉強を続けることが、生き残るためにも大切になってくると思います。私も、まだまだ頑張りますよ(笑)。

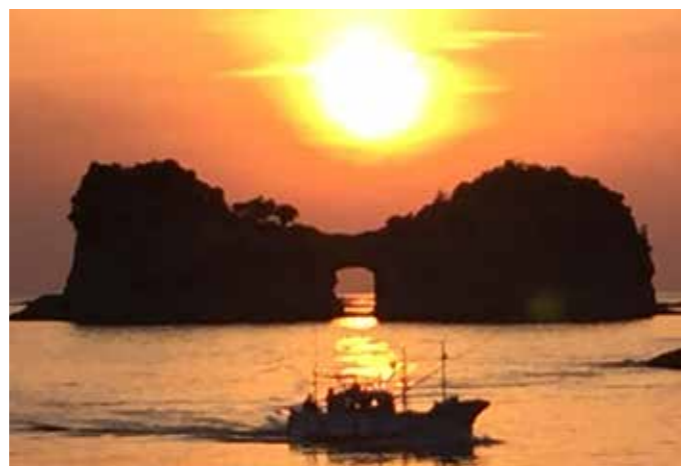
数々の試練を乗り越え、事業存続のために奔走し続けてきた橋野社長。経営が苦しかった時代には自らの給与をカットしても、社員の給与だけは決して遅れないよう心を砕いてきました。そんな橋野社長は、これからも旭紙工の輝ける未来に向かい、先頭を切って走り続けることでしょう。

—どのようなタイミングで、社長に就任なさったのですか。

1994年(平成6年)、年商が1億円強のとき、得意先が倒産しておよそ1300万円の不渡りが出てしまいました。不動産投資などで借金がかさんでいたところに、追い打ちをかけた形です。

その夜家に行くと、食卓で父は酒を飲んでいました。声を出さず、静かに……。しばらく沈黙が続いた後、「わたしはもうあかん。後はお前がやってくれ」とポツリとつぶやきました。そこで「よし、分かった」と。そこから経営者としての人生がスタートしたのです。

辛い、いくらでも仕事はありません。とにかく1300万円の不渡りを吹き飛ばさなければならぬ。そのために、新たな機械を購入するなど投資も行いました。「こんなところで負けてられへんわ。寝ないで働くしかない」と覚悟を決めたのです。そこから、夜間にアルバイトスタッフを雇い、自分は布団を職場に持ち込んで付きっきりで作業しました。でも、1996年(平成8年)に、約95パーセントの仕事を失うことに



▲白浜・円月島にて

企業情報

- ◆ 創 立 年 : 1983年1月
- ※ 創 業 : 1963年
- ◆ 年 商 : 15億円
- ◆ 従 業 員 数 : 200人

※ 2018年12月実績



私が
紹介します

工場長
加藤 秀樹さん



◀ 主な業務内容とメンバー構成

中綴じ製本を行っている工場です。断裁部門・折り部門・中綴じ部門に分かれて、24時間体制で生産をしています。メンバー構成は、工場長・副工場長2人・工場長補佐1人・各部門長・作業員です。

◀ やりがい



従業員全員の生活を守ることが工場長の使命です。そのため何をしたら良いのか、常に考えながら働いています。「この仕事ここまでやりました!」という報告など、従業員からの何気ない一言を聞くと嬉しいです。

◀ 強み

お客様のご要望に可能な限り対応できるような体制が強みです。まだまだ完璧ではありませんが、効率よく作業を進めていくために、品質や納期に関するルールをしっかりとしり守り報告する、というのは徹底してやってもらっています。また、ここは松原の本社工場と東大阪工場が移転、合併した工場です。これまでとは違う環境、違うメンバーで仕事をするにあたり、業務中だけでなく休憩中などにも積極的にコミュニケーションを取っています。

◀ 取り組み

工場が3階建てになり、各部門へスムーズに半製品を流すのが難しくなったため、コンピューターで管理できるようにシステムを組んでいる最中です。また、本社工場と東大阪工場で微妙な違いがあり、合併後に「物がどこに置いてあるか分からない」という状態になってしまいました。一緒に作業をしてみても初めて気付くことがあまりにも多かったので、それを改善するために様々な取り組みを行っています。



◀ 目標

退職するときに「この会社で良かった」と言ってもらえるような、楽しい工場づくりをしていきたいです。物づくりにこだわりを持って、各々がやりがいを感じられるような環境を目指しています。私自身、合併するまで面識がなかった人が8割以上なので、できる限り全員と話すように意識しています。1つ1つ目標を持って作業する大切さを伝えていきたいです。そして、いずれは日本一の中綴じ製本工場にしたいと思っています。

◀ 思い出深いエピソード

工場が移転するにあたり、東大阪の機械と従業員が先に新工場へ入りました。まだ改装中の段階だったので、ところどころ破損している部分や屋根がない部分があり、3ヶ月くらいは色々苦労しましたね。特に、台風ときには3階から水が漏れてきてしまい、機械が濡れないよう1日3~4回水を掻き出していました。

昨年の台風時に新工場でも雨漏りが発生していたものです。今では雨漏りもなく工場運営を行っています。移転後から12月後半まで雨が降ればモップを片手に雨漏り対応していました。今では笑い話ですが、当時は工場長含む従業員へかなりストレスになっていた事の一つです。

